

油彩

まとめ①籐籠の花を描く

三浦明範の静物画講座

みうらあきのり 1953秋田 東京学芸大学卒 文化庁主催現代美術展、セントラル美術館
 油絵大賞展、昭和会展、安井賞展、具象絵画ビエンナーレ、日本の絵画新報展、両洋の眼現
 代の絵画展、21世紀の旗手展などに出品 文化庁芸術家在外研修員としてベルギーに滞在（'96
 ~'97） 春陽会会員

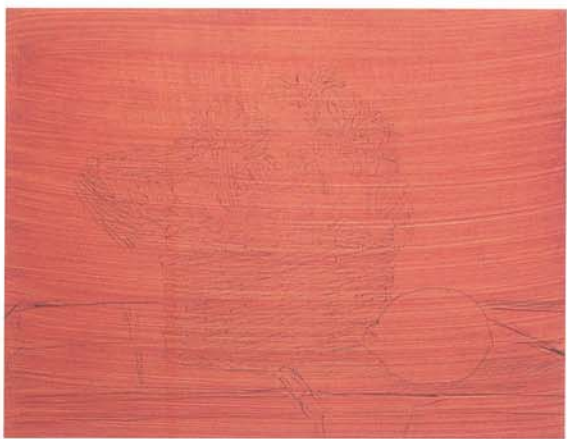
私の連載も、残すところ僅かにな
 ってしまいました。

そこで今回と最終回は、まとめと
 いうことで筆を進めたいと思います。

■ 上手い絵・下手な絵



(制作過程1)
 支持体はF6号のMDFパネル。カオリンとチタニウムの下地塗料を使用。
 下絵を転写した上から、墨でアンダー・ドローイング。



(制作過程2)
 インプリミトゥーラ(有色下地)にするため、油絵具ライト・レッドに油
 メディウムを加え、全体に塗布。同時に下地の吸収性を調節。

先日、某テレビ局の情報バラエテ
 イ番組で、「絵を描く」というテーマ
 でのコメンテーターとしての取材が
 ありました。

は、番組の趣旨として、日常生活で
 あまり絵を描くことのない人たちが
 上手く描く方法、つまり裏技のよう
 なものを求めてきたからなのです。

まったく無いとも言えるのです。
 例えば海外旅行に行って、まった
 くその土地の言葉が話せない時、身
 振り手振りを使いながら単語を羅列
 するだけでも、何とか相手に気持ち
 を通じさせることができます。しか
 し、学校で習ったことや本で得た知
 識を思い出しながら、正確に話さな
 ければなどと考えていると、かえつ
 て何も話せなくなってしまう。そん
 な経験はありませんか。

同じように絵も、上手下手に関係
 なく、描く側に伝えたいことが明確
 にあるなら、その気持ちを込めて一
 生懸命に描けば伝わるのです。逆に、
 上手く描こうということだけを考え
 た絵には、肝心の自分が感じた内容
 が抜け落ちてしまっている可能性す
 らあるのです。(もちろん、そうでは
 ない絵もたくさんあります。)

結局、番組が成り立たないと言う



(制作過程5)

さらにテンペラ白で浮き出し。背景部は混合白を使用。この時点では、画面の大半が薄く白で覆われていることになる。
混合白は、テンペラに水を加えない状態で練ったシルバー・ホワイトと、同色の油絵具を等量ずつ取って混ぜたもの。



(制作過程3)

テンペラ白による浮き出し。背景部は紙に絵具を付けてスタンピング。



(制作過程6)

メディウム入り油絵具で固有色。各々の暗部を基本色に、大まかに塗布。



(制作過程4)

下地の赤味が強いので、メディウムを加えた油絵具ヴィリジアンを全体に塗布し中和をはかる。

■ 絵の文法

ことで、私の方が妥協した形で、渋々ながら方法論とやらを話した次第…。

とはいえ、私たちは「絵を上手く描きたい」という気持ちを、多かれ少なかれ持っていることは事実です。これは、自分の感じたことを、より的確に表現したいという気持ちがあるからなのです。

先の言葉の例で考えると、文法がでたらめでも意思は伝わりますが、よりの確な表現ができれば、ゼスチヤーなど使わずにも伝わります。さらに詩人や小説家など、言葉を専門にしている人なら、感動すら与えることもできるのです。

ただ、私たちは中学、高校と英語の文法をしっかりと勉強させられたわけですが、どれだけ話せるかと言うと、やはり疑問ですね。でも、ネイティブ・スピーカーなら、文法など知らない小さな子供でもちゃんと話せます。

結局、文法というのは頭で覚えるものではなく、身につけるものでし



(制作過程9)
テンペラ白。描く範囲はさらに狭められ、ハイライトの一つ手前の最明部のみ。



(制作過程7)
もう一度テンペラ白での浮き出し。次第に描かれる部分は狭くなっていく。



(制作過程10)
テーブルクロスも描く。最終段階なので布の皺を中心に描く。



(制作過程8)
もう一度油絵具で固有色。中間の明るさ、すなわち最もそのものの固有色と感じられる色。

かないのかもしれませんが。
絵画の場合、この文法に相当する
のが、技法であったり、構図法であ
ったり、遠近法であったり、色彩理
論であったりするわけです。

■まとめとつづ

この講座ではこれまで、このよう
な文法にあたる、技術的な面から説
明してきました。そしてその後、「み
る」ということはどういうことをか
探りながら、絵を描く意味について
思想や精神の面から考え、そして最
後に、美術館での鑑賞も含め、絵を
見る者の立場で考えてきたことにな
ります。

これは絵を描くという行為におい
て、最も身近な問題である「描き方」
から始まり、最も重大な問題である
「テーマ」へとという流れを考えた上
での構成だったので。しかし同時
に、絵を描くために必要な度合いか
らは、逆の道を辿ってきたことにも
なります。

その意味で、この講座で著したか
つたことを一言で表現するとすれば、



(制作過程Ⅰ)
最も明るい部分の固有色を油絵具で。その後、ハイライトをテンペラで起こし、さらに極薄く油彩、壁などの細部を整えて完成。



(完成作品)
「籐籠の花」F6号
パネルにカオリン地、油彩・テンペラ

「絵を描く方法など無い」ということとです。

技法講座でありながら、このようなことを言うのは矛盾したことでしよう。しかし、もし、この講座を読まれた方が私の著したとおりに実践したなら、描かれた絵は「三浦明範の絵」になってしまうのです。

もちろん、この講座を例に出すまでも無く、過去の巨匠を始め、多くの画家たちから学ぶことはあるでしょう。しかし、それはあくまで自分の絵を見つけるための手段であることとは言うまでもありません。もし、それらの中に、何らかの形で琴線に触れるものがあるとすれば、それは自分自身に初めから備わっていたものだったのです。

私の講座も次回で終了です。これまでの内容に、このような発見があったなら幸いです。

結局、絵を描くということは、静物であれ風景であれ、「自画像」を描くということに他ならないのです。

最終回は12月号になります。